第2部　各分野での震災後の取り組み

第9章　自治体の相互交流と援助体制
―宮古市と品川区の交流から災害時相互援助協定へ―

杉本栄子

はじめに

岩手県宮古市と東京都品川区は、「目黒のさんま祭り」が縁となり、平成14（2002）年に災害時相互援助協定が締結された。この協定は、民間のイベントから始まった交流が行政の目に留まり、協力関係が築かれた。震災後はその協力関係が一層深まっている。

そのきっかけとなった「目黒のさんま祭り」は、品川区目黒駅前商店街振興組合が主催、品川区の後援により毎年9月第1日曜日にJR・地下鉄目黒駅東口の目黒通りで行われている。

目黒界隈は江戸時代に松平讃岐守・森伊豆守などの上屋敷があったところで、落語に登場する殿様（松平出羽守）の早駆けの場所とされている。その地が舞台となって「さんまは目黒にかぎる」のオチでおなじみの落語が生まれた。そのよく知られた庶民の古典落語を基にして、平成8（1996）年よりバブルの土地高騰でビルだらけのまちになってしまった商店街の活性化のために、さんまを振る舞うイベントが行われた。

「さんま祭り」には平成11（1999）年の4回目から岩手県宮古市のさんま、平成10（1998）年から徳島県神山町の芳醇すだち、平成13（2000）年から栃木県「高林雷の会」の大根おろし、和歌山みなべ町の備長炭、東京のべったら漬けの提供を受け、平成27（2015）年には新岩手農業協同組合の白米も加わった。年々物産展、ワゴンサービスなども盛んになり、開始時間の何時間も前から、長蛇の列ができるほどの盛況ぶりである。目黒通り沿いの誕生八幡神社では、落語の寄席も合わせて開催される。「目黒の良さ」と「さんまの良さ」の両方をお客さんに楽しんでもらおうという趣向である。

県立宮古水産高等学校の生徒さんの実習授業で作るさんまやさけの缶詰類、塩プリンも人気を呼んでいる。平成27（2015）年9月には20回目を数え、毎年ニュースにも大きく取り上げられるなどますます関心が高まっている。

因みに9月第3日曜日は、駅の反対側の目黒区田道広場で、目黒区民まつりの一環としての「さんま祭り」が行われている。そこでは宮城県気仙沼のさんまが使われている。

震災後、品川区では「目黒のさんま祭り」に加えて、新たな活動、交流が始まった。宮古市役所に派遣された品川区職員が職場で仲間を誘って、また、小学校のPTA連合会から生まれたグループなどによる支援の輪が広がっている。海産物の販売や小学生の交流など地道な活動から人と人の繋がりがより深くなっている。

1　「目黒のさんま祭り」と宮古のさんま

中崎政和さんの話　昭和23（1948）年生
「目黒のさんま祭り」実行委員長、目黒駅前商店街振興組合理事
長上大崎目黒駅前町会長

平成26（2014）年4月1日、品川区誕生八幡神社で伺う。

「目黒のさんま祭り」は平成8年に、誕生八幡神社周辺で始めました。基本的に9月の第1週の日曜日にやるようにしています。

商店街が主催して、商店街の発展のためにやっています。商店街と言っても、真ん中に目黒通りがあり、みんなビルになって、貸しビルのオーナーばかりになってしまった。アーケードがある商店街の形ではないので、活気がなくなってしまいました。そこで、跡継ぎの方たちが20人くらい集まって、日頃商店街を利用してくださる方々にさんまを焼いて、無料でふるまったのが始まりです。最初は小さなバーベキュー用のやつで千匹焼いて、食べていただきました。小さな商店街ですから、それ以外のことはなにもしていませんでした。

例年本州で一番初めにさんまが揚がるのは宮古の漁港と聞いています。宮古は本州の一番北の漁港なんですね。ですからわれわれも時期的に9月の第1週に入荷する宮古のさんまを築地の仲買さんから調達

していました。第1回目のさんま祭りが新聞に掲載される際に、「このさんまはどこのさんまですか」と聞かれました。さんまが入っていた白い箱に宮古漁港と書かれていましたので、「宮古のさんまです」とお答えしました。それを目にしてくださった宮古市の方から、「来年のさんま祭りには宮古市がさんまを提供します」という申し入れの電話をいただきました。それで、平成10（１９９８）年第４回目から毎年提供していただいています。

災害時相互援助協定の締結

さんまを提供していただいた第４回目に、当時の熊坂義裕市長さんはじめ水産課や市の方々がこちらに来てくださった。品川区からもいろいろ協力を得ていますので、品川区長さんはじめ区会議員の方々がお見えになり、そこで接点ができました。しばらくしたら、その縁で品川区と宮古市の間で防災協定を結ぶことになりました。

平成23（２０１１）年東日本大震災のときは、品川区と宮古市が災害時相互援助協定を結んでいますから、品川区が宮古市に支援物資を送ることになり、「目黒のさんま祭り」の縁もあって、商店街にも声をかけてくれました。そこで、何がいいだろうかという話になり、紙おむつなどが不足していると聞きましたので、この辺りも売り切れになっていましたが、商店街の人間がいろんなところを探してある程度集めて、震災５日後、品川区から出るトラックに義援金50万円と一緒に届けてもらいました。僕らも荷物の積み込みを手伝いました。物資が宮古市に届いた直後に、山本正徳市長さんから感謝のお電話をいただきました。

その直後から商店街で宮古を支援する募金活動を初めて、６百万円くらい溜まったので、５月に山本市長さんにお届けに行きました。その時に市長さんから、「こういう状態ですが、宮古市民の復興に対する気持ちを示すためにも、今年もさんま祭りをやりましょう」と言っていただきました。

震災後も引き継がれるさんま祭り

平成23（２０１１）年９月のさんま祭りは、さんまがなくても、協賛をいただいている徳島県の神山町（すだち）、和歌山県のみなべ町（備長炭）、栃木県那須塩原市（大根）などのみなさんと一緒に、宮古市を支援するさんま祭りを開催しようと思っていました。そこに、市長さんが「今年もやりましょう」とおっしゃってくださったので、例年通りのさんま祭りを開催することができました。

平成23（２０１１）年第15回目には、宮古の状況を見てもらうコーナーを設けて、写真のパネルを20枚くらい展示しました。その後のさんま祭りでは、震災時の写真と現状の写真を展示し、復興の様子を伝えています。また、義援金箱を設置し、集まった義援金を宮古市に届けています。

年々さんまの南下が遅くなって、「目黒のさんま祭り」の開催が９月初旬であることから、さんまの提供に際しては大変なご苦労をしてくださっていると聞いています。「なにがなんでも、さんまは宮古で用意しますよ。安心してください」というお話をいただき、われわれも震災前からですけど、「宮古のさんまはおいしいですよ」と宮古市を全面に押し出しています。

写真　震災後も引き継がれるさんま祭り

商店街周辺はもともと広い場所がないところで、目黒通りの交通を半分止めて、宮古市が提供してくださる７千５００匹のさんまを焼いて、みなさんに食べていただいている。僕らは６時から用意することになってい

るけど、その前にもうお客さんが100人くらい並んでいらっしゃる。だいたい2、3万人はお見えになる。山本市長さんも並んでいる方々に、「ありがとうございます」と、声をかけています。

さんまを焼く台は12台あります。宮古市、商店街、小学校のおやじの会、東京宮古同郷会、地域と関わりのある銀行などの大手企業、みゃっこ隊（本章3）など150名以上のボランティアのみなさんが協力してくれています。

東京で暮らす宮古出身者で組織されている「東京宮古同郷会」のメンバー40～50人が、毎年さんまを焼きに来ます。同郷会が僕ら実行委員会のひとりひとりの「宮古頑張ってください」という一言を撮影して、宮古の避難所の何か所かでお見せになって、またそれを見ていただいている方の映像をこっちに見せてもらったりしました。

普段日曜日は休んでいる飲食店も最近は開けています。何時間も並ぶのは大変なので、近くの飲食店でさんまを食べて、「目黒のさんま祭り」を楽しんでくださる方もたくさんいらっしゃいます。

最近は品川区ばかりではなく、他でもさんま祭りの開催が増えているようです。その際には僕らに運営の仕方などの問い合わせがきます。

私たちは、組合員が110店舗の小さな商店街ですが、これからも宮古市の復興のためにできることをしていきたいと思っています。

2　品川区の取り組み

佐藤和彦さんの話　昭和40（1965）年生

子ども育成課庶務係長（震災発生時は広報広聴課。2011年4月～2013年3月　防災課）

品川区職員ボランティア団体「みゃっこ隊」設立

協力

大森直人さん　昭和50（1975）年生　防災課地域連携係長

佐藤史隆さん　昭和59（1984）年生　土木管理課（震災時は防災課）

平成27（2015）年10月21日、品川区役所防災課で伺う。

宮古市と災害時相互援助協定を結んだのは、平成14（2002）年、前区長のときですね。

支援物資の第一便が行ったのは16日。11日に発災して、そのあとすぐ準備をして、本当になにが必要かわからなかったので、取りあえず「行こう」と詰め込んで…。

―佐藤史隆さん：やっと連絡が取れて、あまり不要な物を持って行ってもしょうがない、なにが必要かということをある程度お聞きして、発電機とかガソリンとかをトラックに積んで、第一便が行った。―

佐藤（史隆）は地震のときに防災課にいたんですが、私は地震後に防災課に異動してきた係長でして、地震が発生した3月は広報広聴課にいたんです。で、防災課の職員としてではなく、広報広聴課の職員として映像の関係で携わっていたので、ある程度はずっと付きっ切りで見ているんですけど。実は、私は広報広聴課の更に前は防災課にいたので出戻りなんです。

あのときはどこまで行けるかということはかなり調べていました。どこでガソリンを入れられるかなど確認して、準備をして行った形です。実際高速道路はあまり問題なく進んだようで、高速を下りて盛岡からの国道が大変だったと思います。東北道は段差ができていたようですけど、津波の被害とかはなかったようです。通常のように飛ばすことはできないけど、ガソリンさえ確保できれば行ける感じだったんです。

1年後の平成24（2012）年度の4月から宮古市に職員5名を派遣しています。平成25（2013）年度には女性も含めて事務3名、技術4名ぐらいだと思いますけど、職員の計7名が派遣されています。宮古市のゆるキャラ「みやこちゃん」と「サーモンくん」の着ぐるみのデザインに携わった職員もいます。

（平成26（2014）年度、27（2015）年度は共に7名を派遣）。

品川区から宮古への支援：発災5日後の3月16日に第1陣がトラック

5台に区職員2名が同行して、備蓄物資（食料、飲料水、生活用品など）を積んで役所の前から宮古市に向けて出発した。
第2陣＝3月23日トラック7台に区職員3名同行。区民及びタイ王国からの支援物資（毛布、飲料水）
第3陣＝4月6日トラック4台に区職員3名同行。区民及びタイ王国からの支援物資（生活用品など）
第4陣＝6月22日トラック1台に区職員4名同行。リサイクル自転車60台
第5陣＝8月11日トラック1台に区職員4名同行。区内事業所からの支援物資（生活用品など）
その他義援金など平成27年4月までに14回持参する。
（品川区資料・災害援助協定を結ぶ自治体支援より）

再び防災課に異動

私と大森は地震発生直後の4月1日に、防災課に異動になったんです。ここにいる3人は、私が係長で、同じ係にいまして、その年の8月に佐藤（史）と品川区の幹部職員と一緒に、それまで集まった義援金を持って宮古市を訪問しました。車で明け方に出て、翌日の夜中に帰って来るという夜討ち朝駆けです。その当時はまだまだ津波の被害も残っていた。帰り道はずっと海岸線を行けるところまで走って、山田町を通り、南三陸を通り、陸前高田まで見て一関に戻って、帰ってきたんです。約6か月後に現状を視察することができました。

その後、被災地支援を含め、防災計画も見直せという指令が出てきまして、あるいは支援の手がいろいろなところからきて、義援金が集まってくるんです。その受け取り、確保、宮古市にお渡しするまでの処理など膨大な業務がありました。

ひとつ大きいものは、大森に掛りっきりでやってもらったんですけど、品川区の地域防災計画の見直しに2年がかりで取り組んだことです。当然品川区の町会、自治会も防災に対する意識が高まってくるんです。自分たちの知識や訓練を得たいということで、地震の前とは意識ががらっと変わった。当時は職員が交代で泊まり込む宿日直もあり、大変な忙しさでした。

防災課を離れて支援活動

私は2年間防災課の係長をやらせてもらって、現職に異動になったんですけど、防災課の忙しさから比べて、環境が大きく変わりました。防災課のときは立場がありますので、個人的な支援というのがなかなかできなかった。

当時は若い職員が、プライベートでボランティアとして、瓦礫処理やいろいろな形で支援に行ったという報告は聞いているんですけど、そのとき受け入れ先は彼らを行政の人間とは見ないんですね。行政からしっかり派遣できるのであれば、もうちょっと違うレベルのお手伝いができるのではないかなと感じながら、2年間防災課の係長として考えていました。で、防災課の職員を一歩外れて、携わってきた2年間に感じたことや余裕がでてきた部分もありまして、なにかできないかなあと考えていた時に、嫁から「結婚記念日なのにどこへも行かないの」と催促されたので、「だったら、ドライブしよう」って、プライベートで宮古を訪れました（2013年6月）。日帰りのドライブで、また同じ経路を通り、仕事で行った時（2011年8月）と同じところで写真を撮りました。けど、なにも変わっていなかった、草が生えているだけでした。

漁港でおばあちゃんとすれ違って、「どちらから来たんですか」なんて声をかけられて話をしました。そのときはもう品川区から職員を派遣していたのですが、品川のことが全然知られていないんだなという思いと、同じ場所を見て、被災地はまだなにも変わっていない、終わっていないんだという思いで帰ってきたんです。

ちょうどその頃、1年目の派遣から戻った若い職員がいまして、1年間宮古でやったことを持って帰ってきたのかな？　なにも表していないなと思って、「なにかやらないか」と声がけしたら、「やりたいです」というので、「じゃあ、寄付を集めることはできないけど、これを風化

させちゃあいけない。まだこういう状況だよと伝えよう」と、少しでも復興の支援ができるのであればということで、若い人たちに声かけしてもらって、平成25（２０１３）年７月に「みゃっこ隊」を立ち上げたんです。

被災地では最初に水産業が戻ったので、「イカやワカメを取り寄せてＰＲしよう、原価で販売しよう、パネル展示をして状況を伝えよう」と、８月４日に大崎第一地区の区民まつりでイカ焼きや海産物の販売とパネル展示をしました。それが最初で、それから「できることをやっていこう」と品川区内のお祭りなどで繋がりのあるところにお願いして、人員が集まれば参加させてもらい、海産物のＰＲ・販売やパネル展示をしています。うちの職員も無理をしない範囲で活動しています。

最初の年は海産物を買ったり、写真を見てくださった方にメッセージを書いていただいたんです。いろいろなところで活動してメッセージが溜まった。派遣で行っている職員が、現地で苦労してくれて、パネルに貼りつけて市役所のロビーに飾ってくれました。あまり苦労をかけてもいけないので、それは1年でやめました。

宮古に派遣されている「みゃっこ隊」のメンバーの従兄弟が人気の高いシェフなんです。彼からお願いして、シェフにイカ焼きソースのレシピを作ってもらったんです。佐藤（史）、隊長の鈴木君、私がそれぞれの自宅の台所で、そのレシピを基にソースを仕込んでいます。

活動の定番になっているのは、福祉施設の五月祭りと紅葉まつり、大崎第一地区の区民まつり、西大井広場公園の納涼祭、荏原第四地区の区民まつりなど。また、消費生活展や目黒のさんま祭りで出店者のお手伝いをしています。その他、こぢんまりしたお祭りや青少年委員会のイベントからも声をかけていただいて、活動の場がだんだん広がっています。今は「品川役立ち隊」という中学生から大学生が活動しているグループがあるんですが、「みゃっこ隊」と「品川役立ち隊」のコラボという形でブースを手伝ってもらっています。

3　「みゃっこ隊」を組織する

鈴木達朗さんの話　昭和60（１９８５）年生

荏原第四地域センター。

平成24（２０１２）年４月から平成25（２０１３）年３月宮古市役所に派遣

品川区職員ボランティア団体「みゃっこ隊」隊長

平成26（２０１４）年５月25日、五月祭り（社会福祉法人品川総合福祉センター）で伺う。

平成24（２０１２）年から25（２０１３）年３月までの１年間宮古市役所に行っていました。業務は津波で被災された方の住宅を再建するために、新しく山の中を切り開いて住宅地を造るための土地の買収をしていました。田老と港町の鍬ヶ崎を担当していました。品川区役所では全然関係のない事務関係の仕事をしていたんです。

「みゃっこ隊」を作ったのは、東京に戻った平成25（２０１３）年の８月です。まずは宮古市の被災の現状を東京の皆さんに知ってほしい、それにまだ復興の途中なんだという思いを共有したいということ。そのためにパネルの展示をしました。そして、宮古の海産物を皆さんに食べてもらいたいと思い、品川区内の祭りや商店街のイベントなどに参加してイカ焼きやワカメを紹介したり、販売しています。

メンバーは区役所の若手職員20～30代が30名（２０１６年は40名）くらい。自分の繋がりのある職員たちに「ボランティア活動やりませんか」と声かけをした。地方出身の職員も多くて、興味を持ってくれました。

イベントでボランティア活動

主な活動は品川区で開催されるイベントで海産物の販売をするんですが、「みゃっこ隊」が独自に宮古の漁協などから仕入れ販売する場合と、産直販売のブースを開くところにお手伝いにいく場合とがあります。特に限定しないでできる範囲で参加しています。

「目黒のさんま祭り」は実行委員会があって、「東京宮古同郷会」という団体で、東京に宮古出身者が集まっている会があるんです。みゃっ

こ隊がメインでやるのではなく、前からその会のお手伝いをやらせてもらっています。当日は朝から大変ですが、去年は小雨が降っていたので、まだ匂いがそんなに飛ばなかったんですけど、２年前は匂いがフワッとなるんで、結構きつかったですね。

今日の「五月祭り」は宮古の漁協さんから海産物を仕入れて、「みゃっこ隊」で独自にやらせてもらっています。試食の真崎焼きは、田老の漁協の方が今まで捨てていた茎ワカメを、少しでも商品拡大したいということで開発したものです。タコ焼きのタコのかわりに茎ワカメを入れてあります。食感を楽しんで、茎ワカメの美味しさを味わっていただきたい。水産業者さんから仕入れたイカも会場で焼いて販売しています。

宮古の職員さんも「さんま祭り」や物産展でいらっしゃる方とは交流しています。（「とごしぎんざまつり」、「しながわ夢さん橋」、品川区商連「大商業まつり」などのイベント）

「みゃっこ隊」のメンバーは宮古に行ったことがないので、一般職員同士の交流は難しいですね。田老で開催する「さけあわび祭り」などは東京の祭りとは雰囲気も売っている品物も全く違うので、そういう祭りに「みゃっこ隊」が行って、お手伝いができればいいなと思っています。

4　小学校ＰＴＡの支援活動

原　健治さん　昭和41（１９６６）年生

大原小学校ＰＴＡ会長

平成25（２０１３）年度／26（２０１４）年度品川区立小学校ＰＴＡ連合会会長

平成28（２０１６）年3月29日、大原小学校で伺う。

震災が起こった時に、私が品川区立大原小学校のＰＴＡ会長に就任しまして、被災地になにか支援をしようということで、大原小学校の中で募金活動をしました。1回目と2回目で集まった募金は義援金として、3月と4月に赤十字に送りました。それから、学期ごとにやろうという話があって、その時に赤十字に送るんだったら、「送り先を小学校にしたい」という話が出たんです。

被災地と言っても、青森から茨城、千葉まであって、どこに支援をしたらいいのだろうか、範囲が広すぎる。で、私どもは品川区立の小学校なので、「品川区とゆかりのあるのはどこだろう」って調べたら、福島県の富岡町と岩手県の宮古市でした。富岡町は原発で誰も住んでいないので、支援のしようがない。「じゃあ、岩手の宮古にしよう」という話になりましたが、情報が全然ない状態だったんです。

そこで、品川区の小学校のＰＴＡ会長37人と校長37人で構成している小Ｐ連（品川区立小学校ＰＴＡ連合会）というのがあるんですが、そこに情報を求めたんです。すると、当時の連合会長が「大原小学校1校でやるのではなく、小Ｐ連全体でやろう」と言われて、各校に呼びかけて賛同した小学校の義援金を小Ｐ連でまとめることにしました。

大原小学校ＰＴＡはその後も募金活動や行事ごとに物産展を開き販売活動をしています。２０１６年7月に集まった義援金51万円を鍬ヶ崎小学校に届けました。

「つなこし」の結成

小Ｐ連の有志が集まって活動する中で、「つながるようになればいいね」ということから、「つながる・みやこと しながわ」という意味で、「つなこし」と名付けて、実際に動く実行部隊を6月に発足させました。

平成23（２０１１）年8月1日に私とメンバー3人の4人で初めて宮古を訪問して、宮古市ＰＴＡ連合会（小・中学校が連合している）の事務局長である宮古西中学校の副校長に会って、いろいろと話をしました。そこで驚いたんですが、宮古市と品川区が災害時相互援助協定を結んでいることを、宮古市の人はほとんど知らない、品川区の人も知らないんですね。

最初、われわれは小学生たちに、「早く立ち直ってください」という気持ちから文房具や運動用具を贈りたかった。そういう話をすると、宮古の先生から「子どもたちがもらい物ばっかりして、お金が動かない。

地元の商店がつぶれてしまう。物は復興になるかどうか」と言われて、その話を品川に持ち帰って、「物資よりお金を集めよう。どういう形でもいいから使ってくださいということにしよう」となったんです。そして、12月までに集まった2百万円余を12月25日にクリスマスプレゼントという名目で宮古のＰＴＡ連合会に直接送りました。

その後、宮古から購入品の一覧表や写真が届き、それから交流が始まりました。

「森・川・海体験交流」に招待される

宮古市は震災前から予算を組んで、観光ツアーというのをやっていました。

平成25（２０１３）年に宮古市の姉妹都市である青森の黒石市と八幡平市の小学生、そして災害時相互援助協定で支援してきた品川区が、「森・川・海体験交流」にご招待を受けた。教育委員会経由で品川区の小学校に学校単位での募集があったんですが、手を挙げたのが大原小学校だけだったんです。5年生が臨海学校と重なったので、４年生と６年生の24人が参加させていただき、何人かの保護者と私も宮古市の方から誘われて参加しました。

毎年やるということだったので、そこで「復興を意識するなら親も呼んだ方がいいんじゃないですか。親子で連れてきますよ。是非募集をかけてください。大原小学校だけではなく、われわれ「つなこし」が小Ｐ連に呼びかけましょう」という話をすると、宮古市も喜んでくれました。

平成26（２０１４）年の2回目（8月8日～10日）は、親子20組の募集がありました。そこで、「つなこし」のメンバーが「1人8千円で体験ツアーに参加できます！」というチラシを作成し、品川区の各校に配り、1回目の参加者が体験を話すなど宣伝に努めました。14校から親子20組の参加があり、保護者や品川区の職員もボランティアスタッフとして参加しました。

平成27（２０１５）年の3回目には人数を増やして行きました。

子どもたちは東京にいてテレビを見ても、何もわからない。被災地をじかに見ればいろんな思いがわいてくる。他人事じゃなく、自分たちも共助の精神を持てたと思います。また、都会では体験することのない自然にも触れることができました。ただ、夏休みに入っていたために、学校単位で子どもたち同士の交流ができなかったことが残念です。保護者たちは夜の懇親会で大いに交流をしました。

宮古市の招待事業は平成27（２０１５）年で打ち切りなので、今後も続けて参加できるように、小Ｐ連で資金源などを考えているところです。

森・川・海体験交流：宮古市が平成22（２０１０）年から小学生を対象とし開催している事業。その目的は「市民憲章に謳われている「森・川・海と人とが調和するやすらぎのまちを観光面でもＰＲするため、森の栄養が川を伝い海に運ばれ、宮古市の基幹産業である水産業の海の恵みをもたらしていることについて、森、川、海でのそれぞれの体験を通じ、楽しみながら学習できる教育旅行を造成し、モニターツアーを検証する」とある。（産業振興部の資料より）

おわりに

平成28（２０１６）年2月16日宮古市主催の「ありがとうinみやこ東日本大震災復興事業情報発信フォーラム～東京フォーラム～」が、品川区立総合区民会館・きゅりあんで開催された。宮古市の山本正徳市長の「美しい森、清らかな川、豊かな海を資源とし、安らぎのある『まち』を目指していきます」という開会宣言に始まり、宮古市職員の復興事業の状況報告、1年間宮古市に派遣されていた品川区職員の報告、東京工業大学大学院屋井鉄雄教授の講演「復興のためのハードとソフト～新たなまちづくりへの提言～」、実際に震災を体験した3人と宮古市に派遣された区職員4人をパネリストとしたディスカッションなどが行われた。

まちづくりには「人」が重要であることを確認し、最後に次の「品川・宮古ＩＳＭ宣言」を守り通すことを宣言し、閉会した。

いつまでも　住み続けたいと思える　まちに向けて

「品川・宮古ＩＳＭ宣言」

品川区と宮古市は協力して

1　【活力】いつも、さんま祭を、盛り上げます

2　【安全】いかなるときも、双方の住民を、迎え入れます

3　【環境】いつまでも、住み続けたいまちを、目指します

4　【生活】いまから、賛同する人を見つけ、広げます

品川区民と宮古市民はお互いのまちに

5　【生活】いつかは、素敵な仲間と一緒に、まいります。

以上、５つのＩＳＭ（イズム）を守りとおすことを宣言します。

参加した品川区在住の50代女性によると、防災や復興に関係している人の発表する復興計画の話が印象に残ったという。

「目黒のさんま祭り」から災害時相互援助協定へと発展した宮古市と品川区は、民間と行政の両面からまた人的・物的のあらゆる機会をとらえ、お互いの関係を深めている。この「５つのＩＳＭ」を守ることで、今後より一層の交流が生まれ、それぞれの町の発展に繋がっていくことだろう。